



〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



「信仰の戦い」について

鹿児島教区司教 中野 裕 明

教区の皆さま、お元気でしょうか。

今回は、11月第3主日から第4主日の間に実施される「聖書週間」に因み、聖パウロの言う「信仰の戦い」についてお話しします。

1 テモテ書に次の文章があります。

「しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。『信仰の戦い』を立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです」。（6・11）

12

若干説明を加えます。

テモテは、使徒聖パウロの弟子で、エフェソの教会を治めていました。今でいえば、司教（監督）に当たります。

この手紙の内容は、いわば教会を治める司教の指南書と言われるものです。

冒頭にある「これらのこと」とは、直前に書かれてある「ねたみ、争い、中傷、邪推、絶え間ない言い争い」（1 テモテ 6・3（10参照）が教会内に存在しているという指摘です。

すなわち、宣教司牧上の様々な混乱や、困難にどのような立ち向かったらいい

のかが教示された文章になっています。まさに、故教皇フランシスコが遺産として残した「シノドス流の教会」（第16回シノドス最終文書 2025年5月発行）に盛り込まれている内容と酷似しています。

すける行為のように思えます。しかし、その意図は、イエス・キリストの提示した、福音的価値（正義、信心、愛、忍耐、柔和など）を教会の中で、強く堅持しなさいということでしょう。逆に言えばそれらがなくなるとキリストの教会とはもはや言えない、と理解すべきだと言えます。1 テモテ書を最初から読めば、当時の事情がよく分かります。つまり、私たちが頂いている信仰は、「常に刷新さ

目指すは健全な教会づくり

財政を取り上げた鹿児島教区評議会

司教の諮問機関に位置付けられ「司教の権威のもとに、教区における司牧活動に関する事柄を研究・検討

し、それについての実際的な結論を提示することを目指す」と鹿児島教区評議会が10月13日（月）カテドラル・ザビエル教会の1階ホールであった。

今回の教区評議会は「教区財政について、現状の紹介とその逼迫する財政の立て直しの手段を探る」という狙いで召集されたもので、出席したのは27小教区から主任司教、助任司祭、助祭、信徒代表、教区修道女連盟代表など63人だった。



挨拶する中野司教

は、まず中野司教が「教区の財政事情につ

いては、これまで教区及び小教区の経済問題評議員だけで分かち合ってきた。しかし慢性的な赤字にある教区財政の立て直しのためには、教区民皆に現状を知ってもらうべきだと思ひ、今回のテーマとした。この会での意見をもとに次年度以降の方向性を探りたい」と挨拶した。

司教の挨拶の後には、教区会計部長の泉浩二神父（総代理・玉里教会主任司祭）が教区司祭地区と修道会司祭地区における「教区費の負担割合」、「ミサ献金や祭儀費の取り扱い」などに違いがあることなど教区会計の仕組みが説明されたほか、学校や幼稚園で働く教区司祭たちが教区に入れている「司祭寄付金」の減少理由、また篤志家などの寄付がもたらす「基金」を

頼りに教区会計を回してきただが、その基金も底をついてしまった経緯を報告した。泉神父による説明後には質疑応答の時間がもたれ、教区会計の現状を知った出席者からは「もっと早期に教区財政を立て直しのための手段を検討するべきだったのでは」との指摘があつたほか「この窮状を乗り越えるためには信者の一致団結が不可欠」など意見が出された。

教区では今回の評議会を前に各小教区における信徒数、ミサ参列者数、教会維持費納入者数、納入金額などのアンケートを依頼しており、午後からはその報告をもとに小教区の現状報告が主となった。報告によると、信徒数の減少並びに高

福者レオ税所七右衛門 殉 教 祭

日時：11月16日（日）13時30分
場所：カトリック川内教会
※顕彰式（13時30分）、ミサ（14時）
薩摩の殉教者・福者レオ税所七右衛門
門教朝の殉教に心を寄せ、中野司教司式のミサでその列聖を祈りましょう。

う一つは、人祖「エワ」の例です。イエスの場合は、荒れ野の（ルカ 4・1～12参照）、人祖の場合は、エデンの園（創世記 3・1～7参照）での誘惑です。これらの例で共通していることは、悪魔、すなわち試みる者は、聖書の言葉（イエスの場合）と神の意思（エワの場合）を使って、わたしたちを一日信用させようとしています。その時点でだまされるか、或いは留まつて拒絶するかは本人次第ですが、この場合で、葛藤、或いは、内心の戦いが生じます。この内心の戦いのことをテモテ書は「信仰の戦い」と表現していると思ひます。

ところで、私たちは、信仰者として、テモテ書に倣って福音的価値観（正義、信心、愛、忍耐、柔和）を日々の生活の中で追求しましょう。主日のミサにあずかり、神の言葉と聖体から霊的活力を頂き、生活の現場で、福音の価値観を実践していきたいものです。典礼暦も終わりに近づき、通常聖年も残すところわずかとなりました。有終の美を飾りましょう。

屋久島教会司牧体制の変更

屋久島教会（種子島小教区巡回）は種子島教会側の人的・経済的負担増により、9月27日（土）をもつて種子島小教区から切り離し、教区本部付きの集会所とする事となった。当面は本部事務局長・霧島彬神父が教会管理者となり（同日付）、他の司祭の助けも借りつつ毎月第2・4土曜日の16時に屋久島教会でミサをささげる。

奄美で「聖年のためのミサ」

宣教再開記念の日に中野司教が主司式

「奄美の宣教司牧を考える会」では、去る9月15日（月）、教区本部のご指示・ご指導をいただき「聖年のためのミサ」をささげることができました。

このミサは中野裕明司教様の主司式で、郡山健次郎名誉司教様をはじめ奄美地区各小教区の神父様が皆さん駆けつけて来られ、共同司式されました。

この日は時折、強い雨に見舞われるという悪天候の中でしたが多くの皆さんがミサにあずかることができました。このことは、奄美の信徒の皆さんが、「聖年」の深い意味を再認識し、信仰を深めることに大きく貢献したものと感謝しております。

また、ミサの中では「司祭不在のときの主日の集会祭儀」の講座を受講し、各小教区の主任司祭の推薦を受けた10人の方が「集会祭儀司会者」として任命されました。各小教区では、「集会祭儀司会者」が任命された意義とその役割を信徒の皆さんに、分かりやすく

説明し、良く理解していただくことが大切なことだと思います。

「奄美の宣教司牧を考える会」では、1914年12月に、奄美の宣教師全員が島外に追放され、1947年9月14日にフェリクス神

奄美宣教再開の日の様子

オーバン神父の宣教日記から

戦時中追放されていた宣教師が奄美に戻ってきた宣教が再開された日のこの様子を書いたレイモンド・オーバン・バルトルド・オス神父（カプチン・フランシスコ会）が宣教日誌（訳・松田清四朗神父）に記しているので紹介したい。

1947年9月14日（日）

名瀬の船着き場には、約100人のカトリック代表団の久保氏、郡山氏たちがいた。また、奄美群島政府知事豊島氏、米軍奄美大島特派部隊のE・O・ディクソン大佐、スタバック判事

父、オーバン神父の両神父様が米軍艦にて上陸されるまでの13年間の迫害の歴史を忘れることなく、宣教司牧を考えることを目的としています。

今回、「聖年のためのミサ」式次第その他一切を「奄美の宣教司牧を考える会 典礼部」に任せてくださり、そのためのご指導を下さいました教区本部に感謝申し上げます。

集会祭儀司会者の任命を受けたのは以下の方々です（敬称略）。

當原浩郎、中野和明（以上、聖心）、嘉元伸一（大熊）、徳永雅己、森山武久、久保正子（以上、小宿）、安田孝春、シスター永田晃代（古田町）、山田明（大笠利）。

（報告・奄美の宣教司牧を考える会「典礼部」久保正子）

の門の前でフェリクス神父の写真を撮った。それを日系兵士「ヤマチ」が基地で現像してくれた。よく写っていた。

そこには150人くらいの信徒たちが集まっていた。私たちは彼らに向かつて席についた。まず久保喜助氏が挨拶をした。通訳をしてくれたのは、スタバック判事の通訳官・藤山氏だった。フェリクス神父も私も短い挨拶を返した。

ミサは毎朝7時と決め、この部屋でささげられるよ

オロリッシュ枢機卿を招いて

シノドス学習会

世界代表司教会議（シノドス）第16回総会の第2会期は昨年2024年10月に「最終文書」を採択し、シノドスのあり方に関する使徒憲章「エписコパリー・コムニオ」（2018年）に基づき教皇フランシスコはこれを教皇の通常教導職（*）に属するものと宣言した。教皇はまた帰天の約1か月前にあたる今年3月に、今回のシノドスは本年から2028年10月までを「実施フェーズ」としてその歩みが継続されると発表していた。

これを受けて日本カトリック司教協議会のシノドス特別チームの主催により、この「実施フェーズ」に入るにあたって『最終文書』についての理解を深めることを目標に9月4日（木）大阪高松大司教区本部にて「シノドス学習会」が開催された。集まったのはシノドス特別チームのメンバーの他、各教区の司教及びシノドス教区担当者で、合わせて37人。鹿児島司教区本部からは中野裕明司教と霧島彬神父が参加した。講師はシノドスの総書記

SỢ

Nhật Bản một quốc gia văn minh; con người tử tế, tốt bụng. Cũng là nơi thường xuyên xảy ra thiên tai động đất,...vì vậy luyện nên những con người mạnh mẽ lạ thường. Mạnh mẽ là thế, nhưng dường như họ cũng có một nỗi sợ rất tốt lành: sợ làm phiền người khác. Không hiếm lần ta bắt gặp hình ảnh trên những phương tiện công cộng dù chật ních người, ấy vậy vẫn im phăng phắc, không tiếng la ó, không tiếng nói chuyện điện thoại ồn ào...cũng bởi sợ làm phiền người khác. Và có lẽ vì sợ làm phiền người khác nên đương nhiên không thích người khác làm phiền mình. Bạn thử táy máy tay chân hái trái cam trái quýt ven đường xem, hôm sau cũng có thể cảnh sẽ rời cây, hoặc các anh cảnh sẽ được gọi đến. Chúa Giêsu cũng dạy rằng: "Anh em muốn người ta làm gì cho mình, thì cũng hãy làm cho người ta như vậy" (Lc 6,31). Thoạt nghe có vẻ ích kỷ, có qua có lại: vì muốn người làm cho ta, nên ta mới làm cho người. Nhưng thực ra đó là thái độ đi bước trước. Vì ta phải làm cho người trước rồi, để sau đó người trả lại ta. Nhưng chắc gì người hiểu ý muốn của ta để thực hiện như ý ta. Ta không phiền đến người, chắc gì người sẽ không phiền đến ta? Vậy mới thấy nỗi sợ của người nơi đây là một nỗi sợ rất tinh tế, biết nghĩ cho người khác, hướng về người khác trước khi hướng về chính mình. Học hỏi, chắt lọc điều tốt đẹp quanh ta, nhưng làm sao dung hòa đừng để nỗi sợ ấy khiến ta trở nên vô cảm, thờ ơ với người khác, cũng như đừng xem ta đây chính là cái rốn của vũ trụ này để chẳng ai dám đụng đến.

Lucianhthy spp

シノドス枢機卿を招いて

①上陸記念ミサ

日時…11月23日（日）16時

場所…カトリック屋久島教会（熊本郡屋久島町小島1-7）

司式…中野裕明司教

②「ひまわりの祭典」（主催…NPO法人やくしま未来工房）

日時…11月23日9時30分～15時

場所…「屋久島シノドス記念館」建設予定地（カトリック屋久島教会横）

人形劇、物品販売、ミニライブなど盛り沢山です。



オーバン神父⑤とフェリクス神父「カトリック奄美100年」から



として、今回のシノドスの歩みにおいて、多くの貢献をしているジャン・クロード・オロリッシュ枢機卿（ルクセンブルク大司教、元上智大学副学長）。枢機卿は午前中の講話の中で、今回のシノドスの各段階、教区、司教協議会、大陸、本大会において自身が経験した様々な印象的なエピソードを紹介しつつ、信者一人ひとりの洗礼の秘跡の尊厳とシノドス的な回心を通して働く聖霊による識別が

この歩みの核心であると強調した。午後は参加者が5つのグループに分かれ、「（参加者一人ひとりは）神の民の一員、すなわちキリスト信者としてシノドスの歩みをどのように生きることによって「霊における会話」を実践し、最後に各グループの発表をもって今回の学習会は締めくくられた。（写真）オロリッシュ枢機卿（*）「教皇の通常教導職」とは教皇が職務上果たすキリストの三職のうちの「教える任務」にあたるもので、これに対して信者は「知性と意思の恭順」（『教会法典』第752条）を示さねばならない。

教区評での玉里教会の報告から 高齢化する小教区の現状と未来を探る

鹿児島教区の財政事情を分かち合った今年の教区評議会では、出席した小教区の現状にも注目が集まった。教区本部では、教区評議会を前に各小教区に信徒数、ミサ参列者数、維持費納付者数、維持費の月額についてのアンケートをお願いした。

各小教区の実態は、さまざまであるが信徒数200人余りの鹿児島市草牟田にある玉里教会（泉浩二主任司祭）では、アンケート調査をもとに現状報告や小教区で取り組める改善案についての分析を行ってく

	信徒数	ミサ参加者	維持費納付者	維持費(月額)
10代以下	11	5	0	0
20代	17	4	2	1,000
30代	8	0	2	1,000
40代	33	3	6	7,000
50代	34	10	11	23,000
60代以上	109	34	27	81,920
計	212	56	48	113,920

玉里教会の現状

た。教区報では、他の小教区での取り組みのモデルになればと玉里教会の現状や意見を紹介したい。

玉里教会の信徒数（10月1日現在）は、212人（内訳は10代以下11、20代17、30代8、40代33、50代34、60代以上109）。60歳以上が半分以上という現状である。そのなかでミサ参加者は10代以下は5、20代4、30代0、40代3、50代10、60代以上34の合計56人で、ミサ参加率は26・4%となっている。

そのような玉里教会における教会維持費の納入者は48人で、月額11万4千円ほど（1人あたり約2千4百円）。これも大半が60代以上で、維持費の月額額の7割以上はこの高齢者と言われる方々が収めていることになる。

このような現状だけをみると小教区の、そして教区の現状は惨憺たるものと感じられる。そこで注目したいのが玉里教会での「家庭内宣教が実施され、改善できた」という見通しである。

※未受洗者は含まれていません。

	信徒数	ミサ参加者	維持費納付者	維持費(月額)
10代以下	11	11	0	0
20代	17	10	13	30,849
30代	8	6	7	16,611
40代	33	16	16	37,968
50代	34	22	18	42,714
60代以上	109	49	47	111,531
計	212	114	101	239,673

家庭内宣教がうまく行った場合の想定

玉里教会では名簿から「現状ではミサに來られていないが、家庭内、親戚等のつながりから、教会とつながることの大切さの声掛けができた」との可能性をも探った。その結果、新たにミサ参列の可能性のある信徒を58人とした。その上でその人たちに教会維持費制度のことを理解してもらえれば納入者は現状より53人増加し、維持費総額（平均額を支払ってもらった場合）も現状の2倍になるとしている。

また玉里教会では、小教区での取り組みと教区全体としての取り組みを打ち出した。小教区で取り組むべき事

①教会維持費制度の周知

②維持費袋を支払っている人だけの分ではなく、収入があり支払うべき人の分も用意する。

③ミサに來る人の割合と教会維持費納入者の割合がほぼ比例することから、ミサへの参列率を上げる工夫（家庭内宣教、高齢者のためのミサのための送迎）を行う。

教区全体で取り組む事

①信者がミサにあずかることのできる環境づくり（勤務形態の違いなどを考慮し、主日のミサに参列できない人のためのミサの日の検討、あるいは主日のミサの回数の検討）②同地区の司祭たちの協力が必要に

全国典礼担当者会議

9月8日（月）から10日（水）まで長野県軽井沢町の御聖体の宣教クララ修道会の軽井沢修道院にて、全国教区の典礼担当者が集って会議が行われた。

参加者は日本カトリック典礼委員会から委員長の白浜司教（広島教区）を含めて9人、全国の担当者が22人の合計31人で、鹿児島からは教区担当者の霧島神父が参加した。今年のテーマは「聖週間

なるが、鹿児島市内ならカテドラルでのミサの回数を増やすなど）

②教区の組織の中に「収入源研究チーム」のようなものを設置する。

③教区の固定資産（土地・建物）を将来的にどうするかとの長期的なプランの作成（小教区の合併などを含む）。

④家庭内宣教への共同体としての協力。

⑤デジタル化への対応（信徒籍など信徒の移動に関するもの。またキャッシュレス化の進む時代を見据える現金を持たない若者たちのため）

について」で、現行の儀式書に基づいて典礼委員が神学的な解説を行い、参加者間で儀式的疑問点に関する質疑応答を行った。加えて儀式書の今後の改訂に向けて典礼委員会が準備している内容についての紹介もあった。

また最終日には「司祭不在のときの主日の集会祭儀」の全国での実施状況についても分かち合われ、司会者のための講座や実践にまつわる問題点などについて意見交換がなされた。

イグナチオの霊躁②9

紫原教会主任司祭

貴島丈弥



主、ペトロの手をとられる

霊躁の第2週目から新約聖書本文を使った観想が始められます。ここから五感を使った祈りが特に大切になってきて効果を発揮していきます。

霊躁のはじめに全ての動

ら、第3週が受難の観想になるので、その前までになります。

第1週で、やっと涙の恵みをもたらったのですが、それからまだ深い観想に入ることばできませんでした。指導シスターも色々な方法で私を導いてくれましたが、なかなか入ることはできなかつたので、「まだ何か心に隠してるんじゃないの？早く全部さらけ出しなさい」といったように、

またねちねち、しつこく問われ続けられましたが、自分自身でもなぜなのかわからなかつたので、シスターにいらいらしながらも祈りを続けていました。

そして、やっとその原因のようなものを探し出すことができました。それはわたしを恐怖の中へと叩き落とすようなものでした。深い恐れに囚われながらどうすることもできず、とにかく聖堂に入って、「イエス

様助けてください。わたしを救ってください。助けてください」と心の中で叫んだところ、すかさずイエス様がわたしの手を取り、わたしを囲んでいた暗闇を全て壊してくれました。もう何も怖いものはなくなり、この人とさえ一緒にいれば何も必要ないという思いに至りました。その後に行つたのが博士たちの訪問の場面の観想でした。

会と催し 11月

1日（土）諸聖人の日
2日（日）死者の日

▼死者のためのミサ・名瀬納骨堂前広場・11時
▼死者のためのミサ・カトリック唐湊墓地・15時

▼平秀応修道士命日（1994年）

▼大野和夫神父命日（2016年）

4日（火）中野アカデミー・教区本部・13時30分

5日（水）青年会・紫原教会・18時

8日（土）ラテラノ教会の献堂

9日（日）メニッヒ神父霊名（テヨドル）

10日（月）ガブリエル神父命日（1978年）

11日（火）教区司祭会・教区本部・10時30分

▼司祭評議会・教区本部・14時

▼石神秀人助祭霊名（聖マルティン）

12日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分

16日（日）年間第33主日

▼福者レオ税所七右衛門殉教祭・川内教会・13時30分

▼奄美の宣教司牧を考える会

▼貧しい人のための世界祈願日

▼聖書週間・23日

17日（月）榊修神父命日（2014年）

18日（火）奄美司祭会

20日（木）三木巖神父命日（2000年）

23日（日）王であるキリスト

▼シドティ神父上陸記念祭・ミサ・屋久島教会・16時

▼オリブの会・教区本部・14時

▼世界青年の日

1984年、あがないの特別聖年に、聖ヨハネ・パウロ2世教皇は「大十字架（380cm）を聖ペトロ大聖堂の祭壇脇に設置し、それを「王イエスの人類への愛のしるし」として青年らに託しました。以来、この十字架は巡礼のシンボルとして諸国を旅しています。国連が定めた国際青年年（1985年）の受難の主日に、青年らはこの十字架とともに教皇のもとに集まりました。そして教皇は、毎年受難の主日を「世界青年の日」として祝うように定め、以後23年に一度WYD（ワールドユースデー）が開かれるようになりました。

2020年に教皇フランシスコは、各方面の要望を踏まえ協議を重ねた結果、次年より世界青年の日を主であるキリストの祭日に変更すると発表しました。祝われる日は変わりますが、この日の中心にあるのはつねに、人類のあがない主イエス・キリストの神秘です。

25日（火）カリタス鹿児島・教区本部・16時

30日（日）待降節第1主日

【司教日程】5日中野アカデミー、6〜7日日本カトリック神学院会議、12日中野アカデミー、13日カトリック幼保連盟、15日カウンセリング講座、16日福者レオ殉教祭、17日（20日）韓司教交流、23日シドティ祭、25日カリタス鹿児島、26〜11月1日FABCベナン大会

祈りの意向

【教皇の意向】自殺防止

【日本の教会】日本と韓国の教会

カトリック学校は宗教的真理探求の場

故・糸永真一司教のブログから

カトリック学校は宗教的真理探求の場であり、日本の文化継承の場である

4月は入学の季節。今年も多くの子どもたちが胸膨らませて入学を済ませたことであらう。時あたかも教育改革の論議が日本中で続いている。そこでわたしはカトリック学校を取り上げてみた。かつてカトリック学校に改革の先頭に立つてもらったためである。カトリック学校とはカトリック教会の権威、具体的には地域の教区司教の認可と派遣を受けた学校のことである。

はじめに、日本にあるカトリック学校（幼稚園を含む）の施設数を2002年12月の統計から紹介しよう。幼稚園557、小学校54、中学校98、高等学校113、短期大学26、大学18、高等専門学校1、各種学校6、専修・専門学校9、特殊教育諸学校1の合計883である。

5年前の統計だから現在は少し変動があるかもしれないが、わが国カトリック教会の教勢から見ても多い学校数であり、そこでカトリック的教育を受けた多数の卒業生が各界各層で活躍しているわけで、カトリック学校がわが国教育界に果たしてきた貢献度は高いと言わねばならない。

しかし、少子化や過疎化が進む中、私立学校の経営は一部地方を除いて決して楽ではないと承知している。これまで指導的役割を果たして来た司祭や修道士、修道女も減少し高齢化して、後継者問題はかなり深刻である。

こうした中で注文をつけるのにはいささか遠慮もあるが、カトリック学校の名前を掲げている以上、思い切った次の2点を敢えて指摘しておきたい。

第1は「信教の自由」の問題である。

ここにいる信教の自由とは（註）、理性と啓示によって知られる人間の尊厳に基づくもので、良心に従って特定の宗教を自由に信奉する権利・義務のことである。カトリック学校における信教の自由の問題には二つの側面がある。一つは、カトリック学校に通う生徒（園児、児童、学生を含む）にカトリックの信仰を、具体的には洗礼を、強制しないことである。信仰や洗礼は自分で（幼児の場合は保護者が）自由に選び取るものであって、この自由は十分に守られていると思う。

もう一つは、カトリックの教えを生徒に教える自由である。信教の自由には、宗教的真理を自由に探求する権利と義務が含まれる。自ら存立できない人間がその存在の究極の根源を尋ね、その

かわりを問うことは理性的人間として当然の欲求であり、人格形成の原点でもある。また、この宗教的真理探究の自由こそ私学の私学たるゆえんである。従って、生徒側には自分が選んだ学校からカトリックの教えを学ぶ権利があり、学校側には自分たちが教育の理念とするカトリックの教えを教える義務があるということになる。

この点、カトリック学校側の対策は十分であるか否かが常に問われなければならない。そこに遠慮やためらいがあつてはならないと思う。加えて、神の生きた言葉であり、完全な人間でもあるキリストご自身を生徒に指し示しているかどうかの問題がある。カトリック学校が目指すカトリック

的人格形成の唯一最高のモデルはキリストだからである。校長を長年勤めたことのある神父はいみじくも言った。「カトリック学校はキリストとの出会いの場である」。

第2は、「インカルチュレーション」の問題である。インカルチュレーションとは第2バチカン公会議後教会が強調している問題で、諸国や諸民族の文化を尊重せず、かえってこれを清め、光の部分だけを延ばすことがその真意である。いわば諸文化の根底にあってこれを生かす魂を福音化するものである。同時に、文化の違いを、分裂や対立の理由とせず、かえってこれを人類の豊かな遺産とするため、人類普遍の愛

の原理で一つに結ぶのである。カトリック学校がその教育活動を通してインカルチュレーションを目指すことは当然である。文化の発展的継承は教育の使命であり、文化の福音化は教会から託されたカトリック学校のもう一つの使命だからである。

（註）信教の自由の意味するところは十分に理解するには、憲法20条の文面だけでは足りない。第2バチカン公会議の『信教の自由に関する宣言』は簡潔ではあるが、信教の自由本来の意味、目的について、理性と啓示の両方の根拠を示しながら明快に説明しており、関心のある方には特にお勧めする。

（2007年4月）

11月16日は 貧しい人のための世界祈願日

いつくしみの特別聖年（2015年12月8日～2016年11月20日）の閉年にあたり公布された使徒的書簡「あわれみあるかたと、あわれな女」で教皇フランシスコは、年間第33主日を「貧しい人のための世界祈願日」とするよう定めました。

わたしたちは、ご自分を小さい者や貧しい者と等しくなされたキリストに倣い、貧しい人、弱い立場にある人に寄り添い、奉仕するよう求められています。

不平等や不正義のない世界の実現に向けて、具体的なわざを通して神のいつくしみのあかし人となれるよう、祈り求めていかなければなりません。



要 理

縁関係について尋ねます。

イエス様は「この世の子らはめとつたり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである」と答えられました（ルカ20・34～36）。

この言葉から復活する者は天使のように性別がなくなると考えるのは些か

復活を否定するサドカイ派の人々がイエス様を困らせようとして復活後の血

復活後の神様との関係

神様は「人が独りでいるのは良くない。彼は合つ助けける者を造ろう」と言われ（創2・18bc）、御自分にかたどり人間を男と女に創造されました（創1・27参照）。

夫婦として男女が結ばれることを神様は祝福してくれます。またそれは人間にとっても大きな喜びとなるものです。ですからこの関係が失われるとす

れば少し寂しく感じられるかも知れません。しかし復活によって新しい永遠の命に与ることはそれを補って余りあります。

その「新しさ」とは被造物が神様の前にあって1対1で顔を合わせられるということです。これを教会の伝統では「至福直観」と呼んできました。これによりパウロが語るようにこの世で準備された神様との交わりは死後、復活によって永遠不動のものとなるのです（1コリント13・12参照）。

【存在の階層構造についての図解】

